聖書

聖書は、創造者なる神の「知恵、知識、真理の宝庫」
「直ぐな心で（ヨシェル）」、聖書に向かう者は多くの宝を見つけ、何よりも神に出会う
詩篇119：7、エペソ人6：5「***真心から***」
しかし、深く知ること「知識」をどれほど積んでも、信じ委ねる「信仰」には至らない

民数記24章 →2

バラクとバラムのたくらみ

イスラエルの民、出エジプト後四十年の荒野での放浪生活を終え、
ヨルダン川西岸のカナンの地入植のため、ヨルダン川東岸のモアブの草原に宿営
モアブの王バラク、イスラエルがヨルダン川東岸の地のエモリ人を討伐したことを聞き知り、
イスラエルを恐れた
バラク、イスラエルを呪うため、メソポタミアの予言者（占い師）バラムを雇った
呪いをかけることに二度失敗したバラムの三度目の挑戦が24章

1－9節

（1）三度目のバラムの「***ことわざ***」、これまでと同様、イスラエルに対する祝福
ここでは、語り始める前のバラムの姿勢に変化

1. バラム、三度目は「***まじない***」（1節）を求めに行かなかった
2. ことわざを唱える直前、顔を荒野に向け、そこに宿営をしていたイスラエルの民を見た
3. そのとき、バラムに預言の霊が臨んだ　サムエル記第一19：23
4. 「***ことわざ***」の語り始め（3－4節）の三度目は、誇り、自画自賛をいっそう顕示

バラムの自慢：
①神がご自身を顕されたことに対する優越感
⇔　使徒パウロの謙遜　コリント人第二12：1
②啓示を受け、担うことができる自分の能力
バラム、「目を開けて神に応答した」ことを強調　3、4節
バラム、イスラエルを呪おうと試みたとき、自分の間違いに気づき始めた…が
⇨強欲と野心、―愚かで有害なこの世的欲望― のゆえに、霊的盲目状態に陥る

銘記

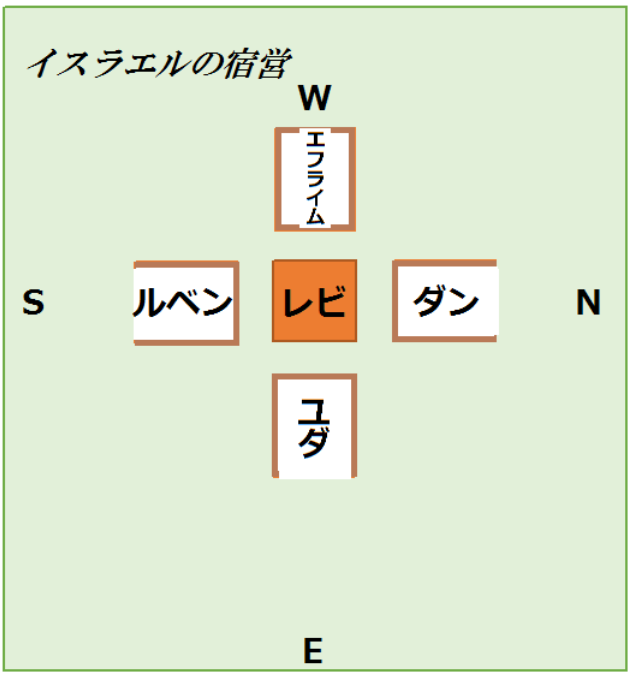
1. 神と神の民に反対する者たち、究極的には自己欺瞞（ぎまん）に陥っていたことに気づかされる
2. 目を開けることによって啓蒙される者は多いが、心を開き、主を受け入れなければ、聖められず、救いに至らない
3. むしろ、誇り、自慢へと導くような知識は、サタンの滅びの道に門戸を開く
目を開けたまま、そこに向かう者は少なくない

（2）バラムがイスラエルに見、あこがれたこと

5－6節　イスラエルの宿営に見た「美しさ」
部族にしたがって整然と統制されたイスラエルの民の秩序
⇨ 同じ神を信仰する共同体の一体性と調和こそ、真の信仰の証し　詩篇133：1
義なる者たちの優性は、神に起因

7節　水の供給は、祝福の中でも最大
「*アガグ*」：アマレク人の王で、当時その一帯で最高の王　　サムエル記第一15：8
アガグ以上の王がイスラエルに現れることを預言　　創世記17：6、35：11
8節 1. 過去：出エジプト時の驚くべき神のわざに、敵、恐怖を募らせた　　ヨシュア記2：10
2. 現在：「野牛」（一角獣）にたとえられたイスラエルの力
3. 未来：獲物にとびかかる獅子のように獰猛（どうもう）なイスラエルを、敵や諸国民は抑制できない
9節　モアブの草原で休んでいるイスラエルは、ゆうゆうと身を横たえている獅子に等しい
バラム、「ことわざ」で、アブラハムへの神の約束を確証　　創世記17：1－8
1. 約束の地カナンの所有　　2. 契約の民イスラエル
⇨アブラハムへの祝福の約束、イスラエル史、人間史で確証されていく　　創世記12：3

バラム、イスラエルの宿営に何を見たのか　　→8️⃣
贖われた民イスラエルに反映された「十字架の美」　民数記1－4章



10－14節
バラク、失望から憤り、バラムを国から追い払い、計画不成功の責任を神に転嫁
⟹神の御旨に従ったバラム、期待していた報酬をすべて喪失
バラム、最後に精一杯、弁明
1. 王の失望に、13節で正しく言い訳
2. 王の失望を償（つぐな）う努力
①諸国民に関する預言を告げ、バラクの好奇心を満たした
②イスラエルによる恐ろしい出来事は、後世起こること、今は大丈夫と確信させた
③バラム、イスラエルに害悪をもたらす別の方法をにおわせた
「*あなたのために申しあげましょう*」（14節）は「あなたに助言しましょう」の意
バラム、バラクに私的に「助言なるもの」を告げた
⟹後に、そのこと、―偶像崇拝への誘惑― は明らかになる　　31：16
⇨後続の段落、他の章、聖書の中の他書から、出来事の正しい経緯を解明

15－25節 →4、5

(1) 最後の「*ことわざ*」でバラムの自己顕示、いっそうエスカレート
バラム、真の預言者として詐称(さしょう)、にもかかわらず、告げた預言自体は真の預言
バラムの豪語：
1. 自らを「*目のひらけた者*」（15節）、「先見者」として自慢　サムエル記第一9：9
2. 「*神の御告げ*」（16節）を聞いた
3. 追加された自己賛辞：「*いと高き方の知識を知る者*」（16節）
⇨神の知識に通じても、神の憐れみ、愛とは全く無縁に生きたバラム
未信者にも、真理が顕されることの例証
4. 「*全能者の幻*」を見たバラム、
神に対する真の恐れはなく、神を愛すことも、信仰表明することもなかった

(2) イスラエルの王座に着き、民の栄光となる人物に関する預言
1. 近未来的：ひな型として「ダビデ」
モアブとエドムを支配するイスラエルの王が現れる
⟹ダビデによるモアブ、エドム征伐で成就　サムエル記第二8：2、列王記第一11：15－18
2. 遠未来的、究極的：約束のメシヤ、イエス・キリスト
①「*私は見る。しかし今ではない…しかし間近ではない*」（17節）
a. 非常に遠く、はるか先のこと
b. 自分に身近な方ではない
⟺ 自分の罪の問題に救いをもたらす「贖い主」　ヨブ記19：25
②その人物は「*星…杖*」（17節）として、「*ヤコブから出る*」（19節）
イスラエルから出る栄光と力と権威を帯びた、その人物は地を支配する
⇨4BCE頃、東の地の賢者、ユダの地の上に尋常でない光を放つ星に目を留め、
ユダの王としてお生まれになった方を尋ね求める旅へと駆り立てられた　マタイ2：2
③その人物の王国は全世界的、すべての反対する者に打ち勝つ
その人物「メシヤ」、全世界にご自分の支配、権威、力を樹立される　ダニエル書2：44
④「*イスラエルは力ある働きをする*」（18節）
⇨神のしもべは、メシヤを通して暗やみの力に対して、霊の戦いを戦い続ける

(3) アマレクとケニ人に関する預言
1. 「*<u>アマレク</u>は国々の中で首位のもの…その終わりは滅びに至る*」（20節、下線付加）
エサウの子孫　創世記36：16
イスラエルに攻撃を仕掛け、征服された最初の者　出エジプト記17：8－16
この世で偉大な王国も、究極的には滅ぼされ、根絶やしにされる
⟹バラム、モーセの記録、―アマレクの滅び― を確証　出エジプト記17：14－16
2. 「*しかし<u>ケニ人</u>は滅ぼし尽くされ…アシュルが…*」（22節、下線部はNIVほか）
自然の要害に住み、諸国民の中で安泰であったミデヤン人イテロの子孫　士師記4：11
アッシリヤ人にとりこにされるまで、絶えない敵の攻撃にさらされ、次第に衰える

(4) ヤペテの子孫「***キティム***」、―ギリシャ人、ローマ人― による近東制覇の時代を眺望
アッシリヤ人とカルデヤ人の王国　→メディヤ・ペルシャ　→ギリシャ　→ローマ
1. 西欧勢、アッシリヤ勢を滅ぼす
2. ギリシャ、ローマ勢、「エベルの子ら」と呼ばれたヘブル人（ユダヤ人）を苦しめる
3. ローマ帝国自体も、永久に滅びる
⇨人手によらず切りだされた石がこの世のすべての王国を砕くとき成就 ダニエル書2：34
諸国家、諸国民の興亡、すべての革命は主のわざ、卓越した指導者は神ご自身　23節

「***…バラム…立って自分のところへ帰って行った。バラクも帰途についた***」（25節）：
バラム、メソポタミアへ、その後、ミデヤン人たちのところに戻り、彼らに悪魔的な助言を与え、そのことは、引き続く25章で実践に移された
究極的に神、バラムの巧妙なたくらみに対してバラムを裁かれた　31：8、ヨシュア記13：22

バラムの過ち：
1．「***ベオルの子バラムの道***」　ペテロ第二2：15
不義の報酬を愛したバラム
宗教を富の手段とした
2．「***バラムの迷い***」　ユダ11
バラム、イスラエルの敵に雇われ、神の民を呪う仕事に従事
私利私欲のために神を敵とした
3．「***バラムの教え***」　黙示録2：14
霊的姦淫（この世との結婚）、―偶像、天体、自然崇拝、宗教への隷属ほか―
⇨偽預言者バラム、この世に妥協した放埒（ほうらつ）な生活の果て、神の敵とともに滅びる

民数記24章の登場人物、部族、民のリスト		
名		民族
バラム		
バラク		
イスラエル/ヤコブ	神の選びの民	
アガグ		
モアブ		セム族
エドム/セイル		セム族
アマレク		セム族
ケニ人		セム族
アシュル		セム族
キティム		ヤペテ族
エベル		セム族
エモリ人	24章以前に登場　王シホン、オグ、	ハム族
ミデヤン人	25章に登場	セム族

ヘブル語（旧約）聖書を楽しく読むポイント

✧　全三十九書の中で、登場人物各々が演じている役割を注意深く読み取る
特定の登場人物の生涯、性質、行動に、イエス・キリストが顕され、
象徴されていることを知り、キリストの「ひな型」として描かれている人物を発見する
同じように、神の敵の「ひな型」として描かれている人物、国、都を発見する

✧　モーセ五書は聖書解釈の基本的原則を網羅（もうら）
登場人物、国、部族の系図から、各々のイスラエルとの関係を知る

✧　原則、―聖書は聖書自体を解釈する― に則って聖書解釈を試みる
諸出来事をまず、歴史的背景、文脈の中で解釈し、
次に、その書の他の章、あるいは、全聖書の中の他書に、
副次的に記されている事柄とを関連させ、文意を正確に読み取る

✧　原則、―聖書の預言は人の私的解釈を施してはならない― に則って預言解釈する
神の預言と、聖書自体が証しするイスラエル史、人間史の中ですでに成就した預言とを
関連づけ、神の啓示の流れを理解することによって、
まだ成就していない、あるいは、完成されていない遠未来預言の成就を正しく期待する

⇨　神はご自分のご計画を全人類に告げ知らせるため、イスラエルを神の証人として選ばれた
「神の仲介者」―神と人との間の執り成し手― として召名されたモーセの役割が、
「祭司」　⇨「預言者」　⇨「王」　⇨究極的に「キリスト」へと継承されていく
「神の贖いの人間史」の流れを、イスラエル史を通して理解する

究極的に、イエス・キリストが「預言者であり、祭司なる王」として、神の仲介者の役割を
完全に成就されたことを、全聖書から読みとる
キリストの再臨、地上に成るメシヤの御国の到来によって、聖書の全預言は成就する
そのときは近い！